

福祉

セミしぐれの次にくるものは？

厚生省は六月十三日、事務次官を含む大幅な人事異動を行ったが、同日午後、恒例の新旧次官の交代式が全職員を集めて開かれた。

本人一割負担の健保法改正を実現させた吉村前次官はまず、「三十三年の役人生活で厚生行政も日本も変わり、今後が変わっていくだろう。重要なことは天下に対して柔軟・勇敢に対応していくことだ」と、昭和二十八年に厚生省に入り、国民皆保険体制の見直しを自らの手で行ってきた長い役人生活の感慨を述べた。

そして、「己の知恵と器量の限りをつくして対応していくことが大切だ」と、一時代を画した自らの行き方をさらりと説いたあと、「セミしぐれを奏でさせてもらって、運のよい役人生活であった。命の限り鳴いたセミも、今日でやむ」としめくくった。

常に率直にものをいうために、保険局の審議官当時から、何度か舌禍事件を起した。それをセミしぐれにたとえるあたり、心にくい。次官OBとして、今後の厚生行政に陰に陽に影響力をもっている。

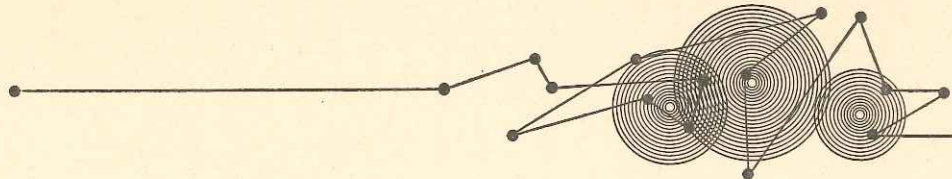
くことはまちがいない。

嗣次に幸田新次官は、「身のひきしまる思いである。ひとつひとつねばり強く取り組んでいく」といってから、①誇りと自覚をもった行政、②先見性のある先手必勝の行政の二つを職員に要請した。

すなわち①では、「国民皆保険体制がなし崩しになることが危惧されているが、われわれは福祉のプロの集団であり、福祉を実行するのが厚生省だ」と述べ、②では、「二十世紀もあと十数年となり、超高齢化社会を見通して時代を先どりする頭脳集団でなければならぬ」と強調した。新次官としての意気ごみを感じさせるものであった。

副吉村氏を真向から勝負する剛速球投手だとしたら、幸田氏はコントロール抜群、緩急自在のニスとといったところ。厚生省がこれまでの路線を継承していくのは当然だが、組織を動かすのはやはり人間、トップの交代でどんな新風を吹き込むか。当面はゼロシーリングのもと、来年度の厚生省予算をどう組むかという難問が横たわっている。

座標



国会

大学病院に改善勧告

国立大学医学部・附属

げる。

「国立大学医学部・附属病院の管理運営に関する行政監察結果報告書」を総務庁行政監察局がこのほどまとめ、改善のための勧告を行った。医学の殿堂として患者は黙っていても集まる大学病院だが、〃白い巨塔〃としてとかく悪いウワサはたえず、東京医科歯科大の教授連をめぐる汚職事件は記憶に新しい。そして、〃殷様商売〃にアグラをかいて患者サービスも決してよくない。行政監察による改善勧告も当然だろう。もちろん他の病院にとっても〃他山の石〃であり、参考になるところも多いはずだ。

まず「患者サービスの向上」では、次の五点の改善を勧告している。外来の診療開始時間が決まっていなかったり、駐車場の三分の二が職員・学生用で占められているなど信じられないくらいに患者無視が横行している。

①診療開始時刻は明確に定め、外来患者への周知措置を講じて励行する。

②夕食の配膳時刻が早くなっているものは、調理員などの勤務形態の見直しを行い、その時刻を繰下

げる。

③駐車場は、職員・学生用と外来者用との駐車面積の配分の見直しを行い、その管理を適正化する。

④病院内の環境は、外来廊下などに置かれている器材・器具の整理、案内標示板などの整備を行い、改善を図る。

⑤防災対策は、患者などの安全を確保するため、一層の充実・徹底を図る。

これを裏返したのが今日の大学病院の実態であり、一度でも訪れたことのある患者であれば、思い当たる点が多い。ぜひとも勧告が生かされるよう期待したいものだ。

「病院収支の改善」でも、民間委託・一括調達など次のように勧告している。大学病院の課題は多い。

「共通役務業務の民間委託、物品の一括調達などを促進するほか病床利用率の向上を図るため、診療科別の病床配分を見直して病床の弾力的な運用を促進する必要がある。また、附属病院の収入の増加、経費の節減に資するため各種の指標などの把握、分析に努めることが必要である」。